

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



- ◆最上義光所用「三十八間総覆輪筋兜」
- ◆直江兼続の最上侵攻
- ◆参加者の声 こども講座
- ◆研究余滴 山形の主「長松丸」

No.15
2008年3月発行



最上義光歴史館

「三十八間総覆輪筋兜」

池田 宏

兜の変遷

日本の甲冑は、鉄・皮革・漆・組紐・金工などさまざまな工芸技術を使って製作されており、世界の甲冑のなかでも彩りが豊かで独特の美しさがある。甲は「よろい」、冑は「かぶと」であるが、平安時代からすでに甲を「かぶと」、冑を「よろい」と読む例が文献にみられるので解釈には注意が必要である。一般的には鎧、兜を用いることが多い。頭にかぶる兜は、頭部を護る半球状の鉢と、鉢の下縁に付けて頸部から顔の左右を保護する鞆からなる。平安時代から江戸時代にかけて、星兜、筋兜、当世兜などが用いられた。

兜の鉢は、通常数枚から数十枚の緩く反らせた台形の板を鋳で留め、鉢の裾には帯状の腰巻の板を廻らせて形作られている。鋳の頭を円錐形にしたものを星と呼び、表面に星が並んだ星鉢の兜が星兜である。星兜は平安時代から室町時代を中心に用いられた。南北朝の頃から室町時代にかけては、星に

代わって頭の平らな鋳を使い、表面の板の端をわずかに折った筋が目立つ筋兜が普及した。張り合わせた台形の板の枚数から何枚張といい、表面の筋の間の数から何間の星兜、筋兜と称している。初期の星兜には、頂辺に髻を出すための径5cmほどの孔があったが、髻を結わずに兜をかぶるようになった鎌倉時代後期から頂辺の孔は小さくなっている。時代の降下とともに鉢の平面は、前後径、左右径がほぼ同寸の円鉢から、左右径よりも前後径がやや長い楕円形の頭形鉢と変化し、間数が増加する傾向が認められる。

桃山時代から江戸時代になると、簡素な鉢に毛を貼ったり、各種の立物を立てたり、山岳・動物・魚介・器物などさまざまな形を紙などで張懸とした兜が多く製作された。このような兜はそれまでの伝統的な星兜や筋兜に対して、当時の新形式の兜として当世兜と称された。当世兜には、奇抜な形のものも多く現在では変り兜とも称されている。江戸時代後期になると、星兜や

筋兜を手本とした復古的な兜が作られるようになり、現在の五月人形の兜にその面影を伝えている。

筋兜の概要

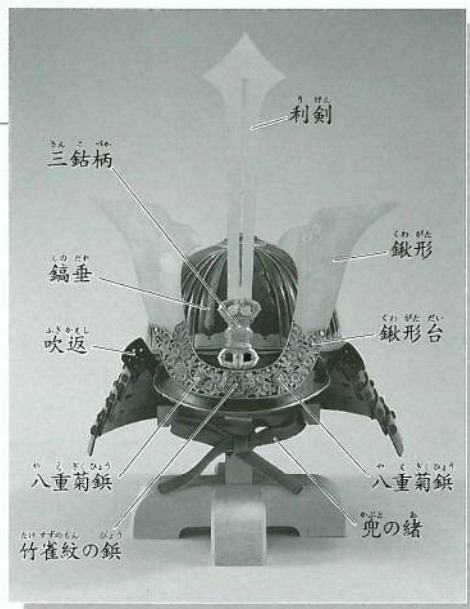
法量 鉢高 一三・二cm
鉢前後径 二二・〇cm、左右径 二〇・三cm (腰巻の板上端で)
鞆丈 一四・三cm (後中央で)

最上家に義光所用として伝った兜は三十八間の筋兜である。鉢は室町時代後期に多く製作された総覆輪の筋鉢であるが、

鞆は当初からのものではなく、のちに新たに作られた当世風の筋が取付けられて



三十八間総覆輪筋鉢
(鞆をはずした状態)



いる点が大きな特色である。平成元年に、損傷していた鞆の威糸や鉢裏の受張などが東京国立博物館内の甲冑修理室の小澤正實氏によって修理されて現状となった。

鉄製黒漆塗の鉢の表面は三十八間であるが、修理の際に鉢裏は四十二枚張であることが確認されている。鉢の平面は楕円形で、頂辺の孔が中心よりやや後にあり、鉢の前側はなだらかに傾斜し、後側は切立った形である。頂辺には銅地鍍金魚子地枝菊文高肉彫の円座に、透菊座、菊花形の立廻、小刻座、玉縁を加えた飾金物を据えている。玉縁の孔の径は二・一cm。鉢表面の各筋に銅地鍍金の覆輪をかけ、裾廻りの各間に猪目形透かしの八双形の斎垣を付けた総覆輪の筋鉢といわれる形式である。鉢の正面には花先形の装飾である錘垂を三条、後に二条付けるが、正面射向側

(着用者の左側)の一条は欠損している。欠損した鎬垂近くに打ち込み疵があり、覆輪も中央で曲がり、周囲の漆もひび割れが生じている。眉庇は鉄地黒漆塗、覆輪懸で、後述の鍬形台を打っている。鉢裏の受張は、紺麻に紺糸を百重刺として、花小文章の小縁を付ける。紫の平絹の兜の緒は傷みが甚だしかったため修理の際に章紐でまとめられ、現在は熏草の緒が付けられている。兜の緒の鑲は、鉢の左・右・後の三所付とするが、左右は鉄地銅着せ、後は銅の鑲である。

鞆は、鉄製黒漆塗一文字頭板札五段下り、黒糸素懸威、十一通。一段目を銅地鍍金の笠鉾四点で腰巻の板に付ける。一段目の両端は、外側に反らせて吹返とし、吹返には星梅鉢形の六つの孔をあけている。
この兜は、慶長五年(一六〇〇)九



月から十月の長谷堂城の合戦で、義光が着用し鉄砲玉を受けて筋金が窪んだ兜として最上家に伝わったものである。義光の曾孫にあたる最上義智が貞享元年(一六八四)に老中に提出した『最上家伝覚書』(内閣文庫本、国立公文書館所蔵)に、

一、景勝と合戦之刻、自信長賜候桶革胴之甲冑を帯シ、出羽守相働候刻、鉄砲玉甲の真中に中り、筋金相窪ミ申候、

とある兜に該当すると考えられており、これは織田信長より贈られた桶革胴の甲冑であったことをうかがわせている。

鍬形の復元

兜の鉢に立てる装飾を立物といい、鉢の前に付ける前立、頂辺に立てる頭立、脇に立てる脇立、後に立てる後立の類がある。平安時代以来、武士

に最も好まれた前立が鍬形である。初期の形状が、農耕用の鍬の刃先に類似することから鍬形と称され、角にあたる鍬形と角元となる鍬形台からなる。平安時代は必ずしも兜につけられたものではなかったが、南北朝の頃から盛んにつけられるようになり、室町時代になると鍬形台の中央に利剣を立てて左右の鍬形と併せて

三鍬形としたものが流行した。

この筋兜の正面の鍬形台も、枝菊文高肉透彫の中央上部に三鉾柄を加えた三鍬形の形式である。このような鍬形台は、通常八重菊などの鉾三点で眉庇に固定するが、この鍬形台は、左右は八重菊鉾のまま、中央が魚子地丸に竹雀紋高肉彫の鉾(径二・七cm)に替えられている。室町時代の鍬形台につく三鉾柄は、全体の上半分のみ形が多いが、この兜の三鉾柄は下半分も加えた全体の形状をあらわしている。

今回鍬形および利剣が、小澤氏によつて復元されて威容を添えることとなった。復元にあたっては紺糸肩取威総覆輪筋兜(長崎・松浦史料博物館)、色々糸威総覆輪筋兜(鹿児島・鹿児島神宮 左図)など室町時代の兜の鍬形が参考とされた。



色々糸威三十間総覆輪筋兜
(重要文化財 色々糸威丸のうち、鹿児島・鹿児島神宮)

最上家伝来の筋兜は、室町時代後期の総覆輪の筋鉢が用いられている。この時代の兜は、札仕立てで扁平に広がった

笠鞆をつけるのが通例である。しかしこの筋兜は、鞆を板札仕立てとし、鉢

内部の受張を百重刺とした点をはじめ、眉庇を章包みとせず、黒漆塗とした点、鍬形台中央の鉾を竹雀紋の金具とした点など、桃山から江戸時代と考えられる仕立て直し認められる。これらの変更が義光の手になるものか定かではないが、丸の内に竹雀紋は、丸に二引両筋とともに最上家の家紋であり、鉄黒漆塗の鞆の形状は、下端も一文字として伊達政宗が好んだ具足の兜に類似している。政宗の母義姫は義光の妹であり、当時の好みや背景をうかがう上でも興味深い兜である。

(文化庁美術学芸課 主任文化財調査官)

略歴

池田 宏 (いけだ・ひろし)

- 昭和30年9月20日生
- 昭和57年 国学院大学大学院文学研究科博士課程前期(修士課程)修了
- 昭和59年 東京国立博物館 資料部 資料第一研究室
- 平成3年 東京国立博物館 学芸部 工芸課
- 平成15年 東京国立博物館 文化財部 列品課 列品室
- 平成18年 文化庁美術学芸課 主任文化財調査官(庶務資料)
- おもな論文、
- 「当世長足の五枚胴の一種について―いわゆる雪下胴を中心として―」
- MUSEUM 40号 昭和60年 東京国立博物館
- 「美和神社所蔵 白糸妻取威の真次について」
- MUSEUM 47号 平成2年 東京国立博物館
- 「高野山学侶室蓋付及装束図」と「狩野晴川図」
- 『調査研究報告書 高野山学侶室蓋付及装束図』平成4年 東京国立博物館
- 「日御神社所蔵の白糸威鎧―現状と文化二年修理の周辺―」
- 『国宝 白糸威鎧 復元報告書』平成8年 出雲市教育委員会

直江兼続の最上侵攻

米沢市上杉博物館

学芸員 阿部 哲人

慶長五年（一六〇〇）九月、直江兼続は米沢から最上領に侵攻し、畑谷城攻略を経て山形城西方の長谷堂城を囲んだ。上杉勢は庄内からも侵攻した。長谷堂合戦は膠着状態となるが、関ヶ原の戦果が伝わるや、兼続率いる上杉勢は一部を除いて撤退した。

同年六月、徳川家康は上洛要請を拒んで会津で領国経営に専念していた上杉景勝に向けて出兵した。このとき会津領国に対する包囲網が構築された。

このような中で上杉氏は旧領越後の春日山に入った堀秀治に向けて越後一揆を扇動した。また、白石城を奪取して上杉領となった旧領を窺う伊達政宗を伊達・信夫方面に迎撃した。一方佐竹氏とは明確に手を結び、相馬氏や岩城氏らとも目立った戦闘はなかった。相馬には使者が送られている。後述のように越後北部（下越）の溝口・村上両氏とも交渉で戦闘の回避が意図されていたが、両氏は越後一揆の鎮圧に動いた。そして、最上義光を山形に攻めた

のである。

さて、菅田慶恩氏は兼続の最上侵攻の理由として①最上氏が伊達氏に比べ戦力的に弱小で攻めやすいこと、②家康の命によって北奥羽の諸士を率いて上杉領へ攻め込もうとしていたこと、③上杉領における会津と庄内を結合して上杉氏の軍備の弱点を補おうとしたことなどを挙げ、特に③を強調した（『奥羽の驍将―最上義光―』人物往来社、一九六七年）。

傾聴すべき見解であるが、会津と庄内の一体化は庄内と連続する越後の下越地方から実現することもできたとと思われる。そこは旧領である。残存した旧勢力とともに上杉家臣団による軍勢が動員されれば、軍事作戦は最上攻めよりも優位に展開できたのではなからうか。また、同じく飛び地の状態であった佐渡との一体性も確保できる。

ところが兼続は、越後一揆は秀治に向け、下越の村上・溝口両氏を攻撃しないように指示している（八月四日付

兼続書状。『新潟県史 史料編五 中世三』所収三二二九号文書。以下、同書からの引用は文書番号のみ記す。現実とは異なり交渉で戦闘を回避したと認識していた（三二二八号）。つまり兼続には下越掌握による庄内の連結という構想はなかった。領国の一体化を目指すにしても、最上領を攻める固有の理由があつたのではあるまいか。

前掲八月四日付書状（三二二九号）で兼続は義光と政宗を討つのは容易いと記している。既に戦いに及んでいた政宗とともに、いまだ軍事行動を起さしていない義光が挙げられている。兼続は義光と政宗を東北における敵対勢力として当初から認識していた。そして、義光や政宗に対する攻撃は家康の動向に規定されていた。また、九月三日付の兼続書状（『山形県史』一）では、景勝の関東出兵に休戦した伊達氏の同陣の可能性を探っているが、政宗との戦闘回避によって初めて景勝の

家康との軍事対決が可能になるのであつた。そして、ここでも義光の動向は政宗と一体的に捉えられている。

九月には義光・政宗の動向が家康への攻撃を規制しており、義光・政宗の動向が家康の背後への上杉氏の攻撃を防いだとする指摘を裏付けるが、基本的な兼続の視線は関東と東北の問題に向けられている。家康の駿府入りで関東への気遣いがなくなつたという認識が上杉家中にある（『山形県史』一）所収九月一八日付上泉泰重書状写）が、上杉氏の活動が関東までを対象としていたことが分かる。会津は関東・東北支配の要地であつた。兼続の行動はこの全国支配の方針に基づく、すぐれて政治的なものと考えられる。

家康との衝突が回避されつつある八月、反転攻勢として義光攻撃の準備が進められる一方で義光・政宗と外交交渉がもたれたとみられる。政宗のように休戦が成立すると、前述のように一転家康攻撃への動員が模索された。上杉氏の課題は東北の家康派の解体であつたと考えられる。攻撃準備は圧力とみられるが、九月三日付書状に示されたように交渉破綻を機に侵攻が実行された。それはあくまで家康派の解体・抑え込みが目的であつたと考える。最上氏を滅ぼす必要はなく、一定の打撃を与えられれば十分だつた。しかし、それは成功しなかつたのだが。

こども講座



参加者の声

「本物の鎧を着たぞー！」

加藤 景子

本物の鎧が着られる!?と親の私が張り切って、子供の意見も聞かずに申し込んでしまいました。鎧やかぶとを目にした事は何度となくありますが、実際に袖を通した機会など主人も私もありません。写真撮影も出来ると聞き喜び勇んで参加しました。参加した長男は一年生。背は高い方ではないので、鎧とかぶとの重さでフラフラです。その重さはなんと15キロ、重いはず。特にかぶとが重かったらしく、頭が首振り人形のように揺れていました。私達親は大笑い。撮影後かぶとだけを脱がせてやると、今度は生き返ったように意気揚場として、刀を上げてポーズを決めていました。また、



火縄銃に興味を持ったようで、体中で支えながらその重さを量る様は真剣そのもの。5キロもあるんだねと意外な重さに驚いていました。歴史にふれる貴重な体験をありがとうございました。

楽しかったなぞうり作り

高橋 莉子

私は、最上義光歴史館で、「きものぬのでぞうりを作る」をやってみました。始めのころは、ぬのをどうかけるかかわからなくて、いらいらしそうです。でも、あとからは、お母さんに少しおしえてもらい、スムーズにできたのでとても楽しかったです。あまりにもぬのをつめすぎて、かたちがへんになりそうだったけれど、先生も手伝ってくれたので上手にできました。いっしょにきた友だちに、「早いねえ。それに上手だねえ。」と言ってももらえたのでうれしかったです。作っている途中で、いとが指にからまってとれなくなりました。それでいらいらしたけれど、ちゃんといとを切ってつつけることができました。ふつうなら作れないものを作



れてとてもよかったなと思っていました。自分でも上手にできたと思えたのでよかったです。またいつてみたいと思いました。(山形市立南小学校三年)

「きれいにほれたぞ」

工藤 凜

日曜日に、「銘ぎり」というのにちようせんしました。まず先生がお手本を見せてくれました。先生は、なめらかに、カンカンカンとかなづちで板をへこませ、字をほっていました。ほくはおもわず、「おー」といいました。そして、ほくは、まず「大空」という字をほりました。でも、「大」の一画目がとてもずれてしまいました。何回も、ほっているうちにうまくなってきたので、「友達」という字を本番の板にほりました。すると、「友」がとてもきれいにほれました。そして、「達」という字は友という字よりとてもむずかしく、一画一画にいねいにほっていました。そうしたら、し

んにようの部分は、すこし形がくずれただけ、一回目の練習の時より、とてもうまくできました。お母さん達に見せたら、「きれいにほれてるね」といわれてうれしかったです。またきかいたと思ったら、もっときれいにほりたいです。(山形市立宮浦小学校四年)



平成19年度 事業スナップ



企画展ギャラリートーク



刀剣鍛錬の実演



史跡めぐり「会津の史跡を訪ねよう!!」
土津神社・保科正之の墓碑



歴史講座「義光塾」修了証書の授与式

平成19年度事業

○常設展示Ⅰ（4月1日～4月22日）

「合戦屏風と収蔵刀剣」

○企画展（4月24日～6月24日）

「鐵 [Kurogane] の美 2007」 ～山形ゆかりの刀匠たち～

・ 刀剣鍛錬の実演（5月5日）会場/最上義光歴史館前公園

・ ガラリートーク（5月5日）会場/最上義光歴史館

・ ナビゲーター/布施幸一氏

○常設展示Ⅱ（6月26日～9月30日）

「季節の彩り」

○常設展示Ⅲ（10月2日～2月3日）

「武士の装い」

○常設展示Ⅳ（2月5日～3月31日）

「寄贈記念特別公開『最上公義氏寄贈資料』」

○史跡めぐり（12月2日）

「会津の史跡を訪ねよう!!」
最上義光歴史館（見学）↓鶴ヶ城天守閣↓飯盛山（白虎隊自刃の地
ほか）↓土津神社↓最上義光歴史館（到着）

○歴史講座

「義光塾」（最上義光歴史館サポーター養成講座）
会場/最上義光歴史館

・ 1月17日「大名最上氏と山形の歴史」

講師/横山昭男氏

・ 1月24日「最上家の文化財」

講師/布施幸一氏

・ 1月31日「最上義光の人物像と武人として、文化人として」

講師/片桐繁雄氏

・ 2月7日「最上家と山形城」

講師/斎藤仁氏

・ 2月14日「文化財の見かた」

講師/布施幸一氏

※2月21日/3月21日「最上義光歴史館見学の手引き」
（サポーター希望者のみ受講）講師/揚妻昭一郎

○歴史講座

「日本刀入門講座」 講師/布施幸一氏・会場/最上義光歴史館

・ 2月9日「日本刀の歴史」

・ 2月16日「絵画にみる日本刀」

・ 2月23日「武将と日本刀」

・ 3月1日「郷土の刀工」

・ 3月8日「日本刀鑑賞の手引き」

○こども講座

「親子で歴史館で遊ぼう!!」
会場/最上義光歴史館

講師/揚妻昭一郎

・ 3月9日「鎧を着て義光公になつてみよう!!」

講師/棚井美果

・ 3月16日「昔の靴をつくってみよう!!」

講師/高橋恒敏氏

・ 3月23日「刀匠になつてみよう!!」

講師/高橋恒敏氏

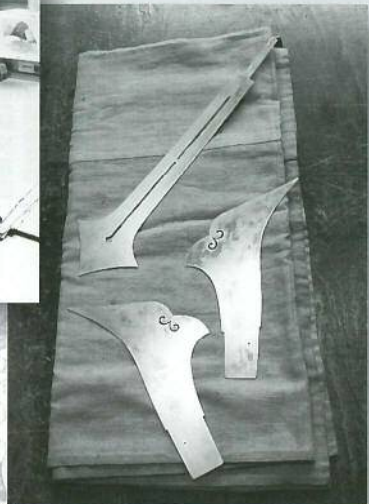
トピックス



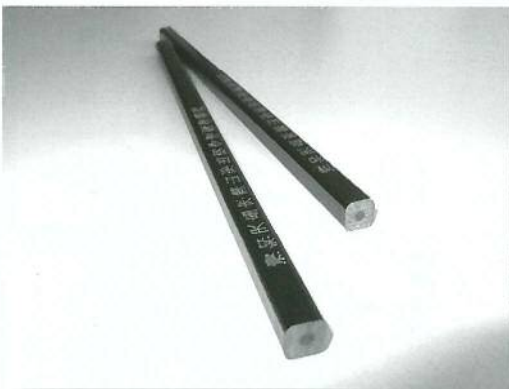
○ 最上義光歴史館のマスコット「モガミヨシ
アキ」のライバル「ナオエカネツグ」が登
場しました。上杉神社蔵の「金小札浅葱糸
威二枚胴具足」を忠実に再現した力作です!!
今後「最上義光と直江兼続からの挑戦状!!」
なども作られる予定です!!



○ 最上家第47代当主最上公義氏より最上義光所用三十八間金覆輪
筋兜をはじめご所蔵資料24件140点が山形市に寄贈されました。



○ 最上義光所用三十八間金覆輪筋兜の三鍬形（利剣と鍬
形）を復元しました。東京国立博物館内の工房で作業
が行われました。



○ 「指揮棒エンピツ」のつや消しバージョンを発売しまし
た。従来のつやありとつや消しのセット300円で販売
しています!!

○ 最上義光歴史館の公式ホームページをリニューアルし
ました。ぜひアクセスしてみてください(^ ^)ノ
<http://mogamiyoshiaki.jp>

※最上義光歴史館の最新情報は公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>

研究余瀆⑧
山形の主「長松丸」
長谷勤三郎

最上義守、義光父子が京都に上つて將軍義輝らと宴を共にしたのは、永祿六年（一五六二）六月十四日だった。これは京都の公家山科言継の日記によって確認される。

この時代、山形の文字史料はまさに寥々たるもので、他所の史料によって山形の様子を推察せざるを得ないのが実情だ。いわば隔靴搔痒である。だから、どんなに小さいものでも確かな史料が欲しくなる。そういうとき、『市史せんだい12号』に収められた「高野山観音院過去帳」を見せてもらって、びっくりした。仙台市青葉城資料館の大沢慶尋氏のお計らいである。この史料は、奥羽の大名一族や家臣、国人らが高野山に参詣し先祖の菩提をとむらった記録簿で、時に「逆修」として在世の親や主君の後生を祈ったものもある。びっくりしたという

のは列記されたなかに、
(a)道清大禅定門 逆修
(b)雲照寺殿帷翁勝公大禅定門 源長松丸
山形殿 享祿二年丑 三月六日
とあるのを見たからである。

これによって、享祿二年（一五二九）の三月六日に「山形殿」を名乗る源長松丸なる少年が高野山に登り、二人の人物の供養を行ったことが知られるわけである。

（b）の「雲照寺殿帷翁勝公」は、義光の義祖父にあたる、第九代義定の法号。没年は永正十七年（一五二〇）とされるから、この年は没後十年にあたる。
（a）の「道清大禅定門」とは正式の法号ではないらしい。この史料で「道〇」という名は、道高／道門／道弘などが他にあり逆修に多く見られる。思い付きの域を出ないが、仮に俗名の一字に「道」をつけて仮の法名にしたとすれば、これは中野義清の可能性大となる。
こう見ていくと「出羽国最上郡山形殿源長松丸」とは、山形殿の地位にある源氏の末葉、元服前の山形城主……行き着くのが第十代最上義守となる。
長松丸（義守）から見て「道清」は実父、「雲照寺殿」は義父となる。彼は高野山に登って、在世の実父と亡き義父と、二人の冥福を祈り最上家興隆を祈願したのであろう。

同じときに「最上山形殿御内 土佐」、つまり山形殿の家来「土佐」なる人物が「道高禅門／妙高禅尼」のために逆修をしているところから判断すると、この人物は同行した家臣団のトップだったのかもしれない。
出羽育ちの純朴な少年長松丸の目に、京の景観・風俗や霊地高野山のたたずまいは、どんなふうに見えたであろうか。彼が第十一代山形城主、「出羽屋形」として嫡男義光を同道して上京し、將軍に謁したのは、二十四年後のことだった。

（1）企画展市民の宝モノ展（継続企画）
（1月14日～4月12日）
山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して、歴史館で展示して展示し、広く一般に公開します。
（2）常設展示
①「鑑[Kanagane]の美2008〜刀の裏側をみる〜」
（4月15日～7月13日）
②「四季の草花（仮称）」
（7月15日～10月13日）
③「武士の晴れ姿（仮称）」
（10月15日～1月12日）

（2）史跡めぐり（年1回）
最上家や郷土の歴史に関する史跡等を現地研修し、現地に赴くことによって郷土史と文化財に対する理解をさらに深める一助とします。
（3）こども講座（年1回）
小学生を対象に、郷土の歴史に触れる機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

（3）調査研究事業
（1）最上家関係資料・史跡調査（継続事業）
最上家等に関する資料・史跡などの研究調査を進め、写真撮影等による記録保存及び目録作成、複写等の資料整備を行い、その成果を紹介します。
（2）「館だより」の発行（年1回）
（4）その他の事業
（1）インターネットによる情報の配信と企画（継続事業）
歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、企画から物販まで幅広く展開します。
（2）「館だより」の発行（年1回）
事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する情報を広く一般に提供します。

平成20年度事業

1. 展示事業

（1）企画展市民の宝モノ展（継続企画）
（1月14日～4月12日）
山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して、歴史館で展示して展示し、広く一般に公開します。

2. 教育普及事業

（1）歴史講座（年2回）
最上義光や郷土史に関する講座、歴史資料・美術資料に関する講座、展覧会に関する講座などを実施し、郷土の歴史と文化の啓蒙に努めます。
①サポーター養成講座「霧光塾」
（1月～3月）
最上義光と最上家、山形の歴史などについて多角的に学習して、歴史館のサポーターを養成します。
②「日本刀入門講座」
（1月～3月）
日本刀の歴史や取扱い方法、鑑賞の基礎知識などを初心者にもわかりやすく解説し日本刀の魅力を紹介いたします。

（2）史跡めぐり（年1回）
最上家や郷土の歴史に関する史跡等を現地研修し、現地に赴くことによって郷土史と文化財に対する理解をさらに深める一助とします。
（3）こども講座（年1回）
小学生を対象に、郷土の歴史に触れる機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

（3）調査研究事業
（1）最上家関係資料・史跡調査（継続事業）
最上家等に関する資料・史跡などの研究調査を進め、写真撮影等による記録保存及び目録作成、複写等の資料整備を行い、その成果を紹介します。
（2）「館だより」の発行（年1回）
（4）その他の事業
（1）インターネットによる情報の配信と企画（継続事業）
歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、企画から物販まで幅広く展開します。
（2）「館だより」の発行（年1回）
事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する情報を広く一般に提供します。

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

【表紙の資料】

三十八間金覆輪筋兜（最上義光所用）

最上義光が織田信長から拝領したと伝える兜です。代々最上家宗家に第一の宝として伝えられました。最上義光歴史館建設に際し、最上家第47代当主最上公義氏のご理解により寄託を受け、平成元年12月の開館から館のシンボルとして多くの方々にご覧いただき、展示公開してまいりました。平成19年7月に、最上家宗家の資料を義光公のふるさとに寄贈したいという公義氏の好意により、兜を含む24件140点が山形市に寄贈されました。三鍬形の復元はこの記念事業として行われたものです。三鍬形が復元された、勇ましい姿に生まれ変わった義光の兜を、これからもたくさんの方々にご紹介してまいります。
※兜の詳細につきましては、2～3頁の池田宏氏の論文をご覧ください。なお、論文中では筆者の意向により「三十八間総覆輪筋兜」と表記しています。

ご利用について

開館時間 午前9時30分から午後5時
入館料 一般 大人300円 高校生200円
小・中学生100円（土曜日は無料）
団体（20名以上）大人240円
高校生160円 小・中学生80円
休館日 月曜日/国民の祝日となる場合はその翌日
12月29日から1月3日
交通 J R山形駅より徒歩約10分
大手町バス停留所より徒歩1分



平成20年3月発行
編集・発行 財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-1004
山形市大手町1-153
☎023-1625-17101
☎023-1625-17102
印刷 株式会社大風印刷

